

4 課

4月23日

洪水



安息日午後 4月16日

暗唱聖句

人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。(マタイ 24 : 37、新共同訳)
人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。(マタイ 24 : 37、口語訳)

今週の聖句

創世記 6 : 13 ~ 7 : 10、2 ペトロ 2 : 5 ~ 9、創世記 7 章、ローマ 6 : 1 ~ 6、
詩編 106 : 4、創世記 8 章、創世記 9 : 1 ~ 17

今週のテーマ

「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって……」(創6:5)。この「ご覧になる」(同6:5)という動詞は、神の初めの創造の1日ごとの区切りを思い起こさせます。しかし、今、神が「ご覧になって」いるのは、「善いもの」(トーヴ)の代わりに「悪いこと」(ラ) (同6:5) なのです。神はまるで、「悪いこと」(同6:5)に満ちた世界を創造されたことを後悔されたかのようです (同6:6、7)。

それでもなお、神の後悔は救いの要素も含んでいます。ヘブライ語の「悔いる」に当たる「ナーハム」が、「慰め」を意味するノア (ノアハ) という名の中に含まれています (創5:29)。このように、この邪悪に対する神の態度には二つの面があります。それは、ある者たちには滅びに至らせる脅威としての正義となる一方、他の者たちには救いに至る慰めと憐れみの約束ともなるのです。

このいわば「二つの声」はすでに、カインとアベル／セトの間に発せられたものであり、それはセト (「神の子ら」とカイン (「人の子ら」) の間の対照を通して繰り返し発せられ、そして今、神がノアとその他の人間たちとの間を区別するためにその声は再び発せられるのでした。

問1 創世記6:13～7:10を読んでください。この人類史初期に起きた驚くべき出来事から、私たちはどんな教訓を学ぶことができるのでしょうか。

ダニエルと同様に、ノアは世の終わりを予告する預言者です。「箱舟」に当たるヘブライ語の「テヴァー」は、外来語として同様の発音で用いられた珍しいエジプト語でもあります。この語は、エジプトからイスラエルを救うために守られた幼子のモーセが隠された「籠」（出2:3）に用いられています。また、箱舟の箱としての一般的な構造に、聖所に置かれた「掟の箱」（出25:22）との類似性を見る人もいます。洪水の箱舟が人類の救済のために備えられたのと同じように、契約の箱も、民の中に臨在される神の象徴として（同25:22）、神の民のための救済の働きを指し示しているのです。

「ノアは、すべて神が命じられたとおりに果たした」（創6:22）との句で洪水のための備えの部分は終わります。「果たした」に当たるヘブライ語の「アーサー」はノアの取った行動について述べていますが、それは神の命令の中にある動詞でもある「アーサー」「造る」に対する応答であり、この言葉で始まるこの部分（同6:14～16）の中に5回繰り返されます。この神のご命令に対するノアの応答は、神が彼にするように命じられたこと、すなわち「造りなさい」との命令に対する絶対的な服従を意味します。この句はまた、契約の箱を造る時にも用いられているのは興味深いことです（出39:32、42、同40:16）。

「神は、箱舟の正確な大きさと、その建造上の指示を明確にノアにお与えになった。人知では、こうしたがんじょうで耐久性のある建造物を考案することは不可能であった。神が設計家で、ノアが建築家であった」（『希望への光』48ページ、『人類のあけぼの』上巻90ページ）。

ここで二つの「アーク」〔箱舟と契約の箱〕の間の共通の目的である救済が再確認されました。ノアの服従はこうして、神の救済の計画の一部として描写されています。ノアは単純に、彼が、神がするようにとお命じになったことに従う信仰を持っていたために救われたのです（ヘブ11:7）。彼は、服従の中に示される信仰の初期の模範であり、このような信仰だけが役に立つのです（ヤコ2:20）。

ノアは「主の好意を得」ますが（創6:8）、それはすでに彼に与えられていた恵みに対する応答でした。だからこそノアは神の命令に忠実に従ったのです。これは私たちすべてにとって見習うべき模範ではないでしょうか。

2 ペトリ2:5～9を読んでください。なぜノアの家族だけが救われたのでしょうか。来るべき裁きについて世に警告するという私たちの役割に関して、私たちはノアの物語からどんな教訓を学ぶことができるのでしょうか。

「造る」(アーサー)というノアの行為に関する動詞は、創世記の創造についてのキーワードでもあります(創1:7、16、25、26、31、2:2)。神への服従というノアの行為は、神の創造の行為のようです。この両者の関連から私たちが学ぶことができる教訓は、洪水は単なる神の人間に対する罰ではなく、神が私たちを救うためでもあるということです。

問2 創世記7章を読んでください。洪水の描写は、なぜ私たちに創造の出来事を思い起こさせるのでしょうか。これら二つの出来事の関連から私たちはどんな教訓を学ぶことができるのでしょうか。

洪水についての聖句を注意して読んでみると、創造の物語と共通する語や表現が用いられているのがわかります。まず「七」(創7:2、3、4、10を同2:1～3と比較)、次に「男と女」(雄と雌)(同7:2、3、9、16を同1:27と比較)、「種類にしたがって」(創7:14口語訳を同1:11、12、21、24、25と比較)、「獣」「鳥」「地に這うもの」(創7:8、14、21、23口語訳を同1:24、25と比較)、そして「命の息」(創7:15、22を同2:7と比較)などがそれです。

このように、洪水の物語は創造の物語とさまざま類似点があります。これら創造の記述の繰り返しは、創造する神は、滅ぼす神(申32:39)でもあることを示しています。しかしこれらの繰り返しはまた、希望のメッセージをも告げます。洪水は、水からの新たな創造となるよう、そして新しい存在へと導くために計画されたのでした。

水の動きは、この新たな創造の出来事が、創世記1章の天地創造の行為の逆の方向であることがわかります。つまり、1章では、下の水から上の水が分かれる様子が描かれ(創1:7)、洪水では、〔上の水が〕その境を越えて〔下の水と〕一つになります(同7:11)。

この過程は逆説的なメッセージを含んでいます。神は新たな創造のために先のものを壊されるということです。新しい地の創造は古い地の破壊を求めます。洪水の出来事は、やがて来るべき終わりの時の世界の救済を予表するものです。「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行……った」(黙21:1をイザ65:17と比較)。

新しく造られるために、私たちの中の何が壊される必要があるでしょうか(ロマ6:1～6参照)。

創世記7:22～24は「水」の圧倒的、かつすべてを飲み込む力を描写しています。それは、「生き物はすべて……ぬぐい去られ」（同7:23）、「百五十日の間、地上で勢いを失わなかった」（同7:24）とある通りです。「神は、……御心に留め」（同8:1）との記述は、このすべての生き物が完全に絶滅した絶望の状況と相反するものです。この聖句は洪水を描写する記述の中心に位置し、この考えが洪水の物語の中心的メッセージであることを示しています。

問3 創世記8:1を読んでください。神がノアを「御心に留め」られたことは何を意味しますか。

「御心に留め」と訳されている動詞「ザーカル」は、神は忘れておられないことを意味します。それは単に精神の活動以上のことを指します。聖書が「神は御心に留め」と言うとき、それは神の約束の成就と、しばしば救済に関わる文脈の中で語られます（創19:29参照）。洪水という文脈の中で語られた「神は、……御心に留め」は、「雨」が「降りやみ」（同8:2）、ノアがまもなく箱舟から出られるようになることを意味しています（同8:16）。

直接の指示は何も受けていませんでしたが、ノアは最初に鳥を、次に鳩を地の状態を確かめるために放します。ついに鳩が戻ってこなかったとき、彼は「地上の水は乾いた」ことを知り、「箱舟の覆いを取り外して眺め」ます（同8:13）。

このノアの行為は実践的教訓に満ちています。一つは、彼が、神が直接語りかけていないにもかかわらず神を信じたことで、もう一つは、信仰は思考し、試すことの価値を否定しないということです。信仰は思考する義務を排除しません。そして私たちが知ったことが真実であるかどうかを確かめます。

しかしなお、ノアは最後に、神が箱舟を出るようにお命じになって初めて行動します（創8:15～19）。彼は箱舟から出ても安全であることを知っていましたが、なお神に信頼し、神のしるしがあるまで箱舟を出るのを待ちました。「彼は、なお、忍耐強く箱舟の中で待った。ノアは、神の命令に従って入ったように、出るときにも特別の指示を待った。

ついに天使が天から下って巨大な扉を開き、ノアと家族に、すべての動物を伴って出てくるように命じた」（『希望への光』54ページ、『人類のあけぼの』上巻106ページ）。

創世記8:1、同19:29、詩編106:4を読んでください。「神は御心に留め」との表現は何を意味しますか。この真理は私たちにとって今どんな意味を持つでしょうか。神はどのように、あなたを「御心に留め」ておられることを示してくださいましたか。

今、契約の約束が成就する時が来ました。「わたしはあなたと契約を立てる。あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい」(創6:18)。この契約は、神の滅びの予告(創6:17)とは対照的な命の約束です。

問4 創世記8:20を読んでください。ノアは箱舟を出て最初に何をしましたか。なぜそうしたのでしょ

六日間の創造の直後に確かに神を礼拝したアダムとエバのように、ノアは、それ自身がもう一つの創造である洪水の直後に、神を礼拝しました。しかしながら、これら二つの礼拝の行為には違いがあります。直接主を礼拝したアダムとエバとは異なり、ノアは犠牲を献げねばなりませんでした。これが祭壇についての聖書で最初の記述です。この犠牲は最も古くから、そして頻繁に献げられた「焼き尽くす献げ物」(オラー)です。この犠牲はノアにとって、感謝の献げ物であり(民15:1~11と比較)、彼を救われた創造主に対する感謝の気持ちを表すものでした。

問5 創世記9:2~4を読んでください。洪水は人間の食糧にどのような変化を及ぼしましたか。神の制限の背後にある原則は何でしょうか。

洪水の結果、植物は手に入らなくなりました。そこで神は、人に動物の肉を食べることをお許しになりました。この食糧の変化は、創造当初の人と動物の関係にも変化を生じさせました。創造の記述によれば、人も動物も同じように植物を食糧として分け合っていましたので、人と動物の間には互いに脅威となるような関係は存在しませんでした。洪水後の世界では、食物として動物を殺すことにより、その関係には必然的に不安と恐れが伴うことになります(創9:2)。ひとたび彼らが互いに捕食するようになると、人と動物の関係は彼らがエデンで楽しんでいてそれとはまったく違ったものになったことでしょう。

しかし、この神の「食糧に関する」譲歩には二つの制限がありました。第一は、すべての動物が食用に適するのではないということでした。この第一の制限は、「清い動物と汚れた動物」の区別の中に暗示されています。この区別は創造の命令の中にも見られます(創8:19、20を同1:21、24と比較)。これに対して第二の制限は明白で新しいものでした。それは、血は命であるという理由から(同9:4)、血を含んだまま食べてはならないというものでした。

問6 創世記8:21～9:1を読んでください。命を守るために神が介入されたことの意義は何ですか。その中に神の祝福はどのように成就しましたか。

命を守るための神の介入は恵みの行為でした。それは人間の功績によるものではありませんでした。神は人間の悪にもかかわらず、地上の命を守ることを決断されました(創8:21)。創世記8:22には、文字通り、「地の続く限り」〔その恵みは続く〕と書かれています。それはこの現在の地球がある限り、季節はめぐり、命は保たれることを意味します。つまり、神はその被造物を見捨てられないということです。

事実、続く聖句〔9章〕は、神の祝福について語りますが、それは創造当初の神の祝福の言葉を私たちに思い起こさせます(創1:22、28、同2:3)。ある意味において主は、人類にやり直すための再出発のチャンスをお与えになったのです。

問7 創世記9:8～17を読んでください。虹は何を意味しますか。この「契約のしるし」(創9:13)は、もう一つの契約のしるしである安息日とどのように関連していますか。

ここで、「契約を立てる」〔に類似の表現〕が3回繰り返されます(創9:9、11、17)。それは〔洪水の物語の〕クライマックスであり、神が初めに結ばれた契約(同6:18)の成就でもありました。〔同9章の〕冒頭部分は、6日間の創造の記述に呼応していますが、続くこの部分は創造の記述の安息日と呼応しています。この部分には、「契約」という言葉が7回繰り返され、安息日と共鳴しています。安息日と同様に、虹は契約のしるしです(同9:13、14、16を出31:12～17と比較)。また、虹は安息日のように、地球のどこでも、だれも見ることができると普遍的な現象です。安息日のように、すべての人が、どこでも、創造のしるしとして虹を経験することができます。それは、すべての人が、どこにいても見ることで、洪水によって二度と世界を滅ぼすことはないとの〔神の約束の〕しるしでもあるのです。

あなたが次に虹を見るとき、神が私たちにされたすべての約束を思い出してみてください。私たちはなぜそれらの約束を信頼することができ、虹はどのようにそれを保証しているのでしょうか。

洪水前の時代の人々の精神と行為を現在の私たちのそれと比較してみると、非常に考えさせられます。間違いなく、人間の邪悪さは今に始まったことではありません。ノアの時代と私たちの時代との共通点を見てみましょう。

「洪水前の人々に、報復をもたらす原因になった同じ罪が今日行われている。神をおそれることは、人々の心から消えうせ、神の律法は冷淡と軽蔑をもってあしらわれている。あの時代の極度の世俗化が、現在の世代にも同様に行われている。……神は、洪水前の人々が、飲み食いすることを非難されたのではなかった。……彼らの罪は、与え主であられる神に感謝せずに、これらの賜物を受け、なんの抑制もなく食欲を満たして、墮落したことであった。彼らが結婚することは正当なことであった。結婚は、神が制定されたものである。これは、神が定められた最初の制度の1つであった。神は、この儀式に特別の指示を与え、それを神聖で美しいものとされた。しかし、人々は、こうした指示を忘れ、結婚を悪用して情欲を満たすものにした。

今日も同じ状態である。それ自身、正当なことが、過度に行われている。……社会の上層部にも下層部にも、詐欺、贈収賄、盗みなどが、堂々とまかり通っている。新聞の報道は、殺人の記事で満ちている。……無秩序の精神は、あらゆる国家に浸透し、時々暴動が起こって世界を恐怖に陥れるが、これは閉じこめられた激情と無法の火のあらわれで、一度抑制が除かれると、全地に災禍と荒廃をきたらせることであろう。靈感が示す洪水前の世界の状態は、現代の社会が急速に近づきつつある状態をあまりにもよく描写している。現在、キリスト教国といわれる国においてさえ、邪悪で恐ろしい犯罪が毎日行われている。そうした罪のために、古代の罪人は滅ぼされたのであった」(『希望への光』52ページ、『人類のあけぼの』上巻100～102ページ)。

話し合いのための質問

- ① 洪水前の社会と現代社会の共通点は何でしょうか。それらの特徴は、私たちに対する神の恵みについて、何を教えているのでしょうか。主は世界を愛し、なおも人類を救おうとしておられます。
- ② ノアの洪水は限られた地域の出来事だと主張する人々がありますが、この考えの誤りは何でしょうか。もしそれが真実なら、地域的洪水(とその後の虹)は、神が嘘つきだと証していることになってしまうのはなぜでしょうか。

忠実な祖父母

中央南アフリカのトウモロコシ農家であるレイネケ一家は、夕食を取るために大きなキッチンテーブルの周りに集まっていた。父、母、7人の息子と4人の娘は、農場で穫れたトウモロコシの粥を、じゃがいも、カボチャ、肉と一緒に毎晩食べていました。その後、子どもたちは食器を片づけ、父はオランダ語の聖書を開いて、家庭礼拝をしました。

ある晩、父は、出エジプト記20章8～10節を読んだあと、戸惑って言いました。「ここで、六日の間、働け。しかし、七日目は休め、と言っているね……」。七日目に休むというのは、彼にとって新しい発見でした。一家は日曜日を安息日として守ってきましたが、それは聖書に書いてあることとは違うと気づいたのです。

父は、聖書の余白に書き記しました。「六日の間、働け」という言葉の隣に「耕作の時間」と書き、「七日目には、休め」という言葉の隣には「休息の時間」と書きました。このことは、父にとって明白でした。レイネケ一家は、第七日安息日を守り始めました。それを見た近隣の農家も関心を持つようになり、やがてそのうちの三家族が安息日を守るようになりました。

時は過ぎ去り、セブンスデー・アドベンチストの文書伝道者が農場にやって来て、『神と人との契約』というオランダ語の小さな本を父に売りました。その本を通して、父と母は初めてセブンスデー・アドベンチスト教会について学びました。彼らは、他にも第七日安息日に礼拝している人々がいることを知ったのです。

その父母がセブンスデー・アドベンチスト教会に加わったという記録はありませんが、11人の子どものうち4人がアドベンチストになりました。孫の1人はギデオン・レイネケという牧師で、南アフリカ・インド洋支部の総務局長として、南アフリカと14の国の伝道の働きを監督しています。ギデオンは、自分のアドベンチストの立場は、1920年代に素直に聖書を読んで従った忠実な祖父母のおかげだと言い、「この物語を世代から世代へと語ることによって、より多くの人ガイエス・キリストのもとに来ることを私たちは祈っています」とも言っています。



今期の13回献金は、ギデオン・レイネケの母国のある南アフリカ・インド洋支部の福音宣教を助けます。心からの献げ物を感謝いたします。(アンドリュー・マクチェスニー)